

で慰めるようだった。彼女はピンクのノートを最初から最後までしっかりと持っていた。

救急車のサイレンの音が鳴り響いた。

病院でセレナは目を開けた。両親はセレナの病床の側に立っていた。しかし、セレナは何が起こったのか覚えていないようだった。

「セレナさんは選択的健忘<sup>けんぼう</sup>で、いくつか記憶を失っている可能性があります。なくした記憶は辛い記憶かもしれませんし、ショックを与える記憶かもしれません」

医者と言った。

「じゃあ、思い出せるようになるんですか？」

